profile

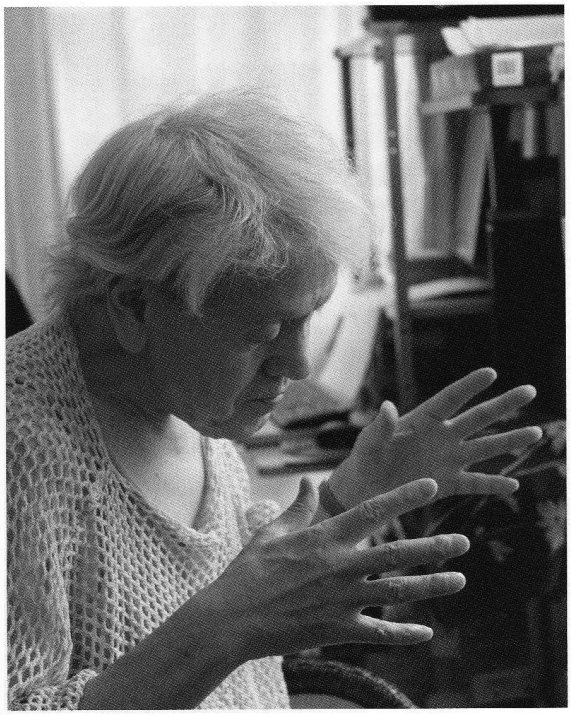
志茂田 景樹　作家。1980 年『黄色い牙』で直木賞を受賞。さまざまな執筆活動のかたわら、独特のファッションセンスと抜群のキャラクター性で多くのテレビ番組に出演。1999 年には妻とともに「よい子に読み聞かせ隊」を結成。全国各地で読み聞かせ行脚を行う。

読書のススメ 志茂田 景樹

Wish to be a book lover

Kageki Shimoda

文　泉田 徹　　写真　中村 路人



本を読まない人は割といると思いますが、それは情報の取り方が違うだけだと思うんですよね。特に今はネットの世界がとても広がっていますから、どこからでも自分の好きな情報にアクセスできてしまう。僕は本を読まないことがいけないとは、それほど思っていないんです。その情報を元に、その人がどのような楽しみ方ができるのかということの方が、よっぽど大事だと思います。もちろん小説に代表されるような本には、その物語に入り込んで、自分の想像力を刺激するような情報の取り方ができるという良さがあります。ですから一概に本を読まないことイコール悪いこととは決めつけちゃいけないと思います。ただ一方で、この情報の楽しみ方がうまくできない人がたまにいます。あまり生きることに熱心じゃないというか、感動をなくしているような方です。こういった方たちは本はおろかインターネットにもさほど興味がなく、一般社会から隔絶した状態に置かれていることが多いんです

何かに感動するのに年齢は関係ない。
それをきっかけに、
いろいろなものに目を向けられるようになる。

絵本は感情を育てる

そのような人を身近に感じたときに、私は感情の動かし方を、やはり幼いころから養っておくべきではないかと考えてしまいます。今私が行っている絵本の読み聞かせ講演会には、老若男女関係なく来ていただいて、みんな絵本に親しみ、楽しんでくれています。例えばその3歳、4歳ぐらいの子供たちに、アフリカで栄養失調や病気の子ども達のために、一生懸命医療支援を行っている、日本人の若い医師のことを絵本に書いて読み聞かせたとします。まだ小さい子供ですから「社会貢献」なんて難しい言葉は思い浮かびません、ですが何かしら心で感じてくれて、誰かの役に立ちたいという感情が芽生えてくるのが分かるんです。その絵本のメッセージというものは、確実に小さな子供にも伝わるもので、そこには理屈も何もいらないんですよ。ですから絵本というのは知識を得るものではなくて、感受性を育てるものだと思います。

読書での感動が、錆びついた感受性を動かす

そして50代60代になってからでも、感受性を豊かにしていくことはできると思いますよ。例えば分かりやすい例でいうと読書。それまであまり読書しなかった人、あるいは若いときにいっぱい読書をしたけれど、ずっと仕事に追われて読書らしい読書ができなかった人が、定年後、何気なく読書を再開して、数冊目に読んだ本にものすごく感動するなんてことはよくあるわけですよ。それは錆びついていた自分の感受性が、読書での感動が潤滑油となって、また動き出したということなんですね。若い多感な年齢のころは、何でも自分の身の回りにあるものに驚くことによって、感受性が常に刺激されているのですが、齢を重ねると鈍化してしまう。

何かに感動するのに年齢は関係ないんです。そこで得た感動は素晴らしいものだし、それをきっかけに、いろいろなものに目を向けられるようになってきて、今よりももっといきいきとした60代、70代になっていくことができる。年齢を重ねるほど、自分の感受性の存在を意識して、豊かに息づかせてやろうと思っていないとダメだと思います。そうすることによって「何かをしよう」という気持ちが出てくるじゃないですか。モチベーションはそういうことによって、高まってくるんです。そういう意味では60代というのは自分を見つめ直し、再生を図る時期だと思うんですね。自分に対する問いかけをなくしちゃダメなんです。今までの競争社会とは違う新たな自分の人生ですから、何が自分に一番価値のあることなのかを見いだしてほしいですね。周りを見てまねることも比較することも必要ないわけですから。

志茂田景樹さんが推薦する、60代が今読むべき一冊

人生の転機でもあるこの世代の人におすすめする本は、明治、大正期の小説家で軍医でもあった、森鴎外の作品。長年の鎖国から一気に近代化を迎え、急速に入ってくる西洋という概念をどう受け入れ、その中で自分がどう生きるべきなのかを模索しながら懸命に捉えようとする感情が作品に表れている。その中でも『うたかたの記』は『舞姫』と並ぶ鴎外初期の傑作

舞姫・うたかたの記　森鴎外／角川文庫